看護業務 DX がもたらす生活リハビリへの貢献
～バイタル自動入力による直接ケアの創出～

所属機関：医療法人臼井会 田野病院　回復期リハビリテーション病棟
演者：谷岡潮音（看護師）
共同：弘末小雪　鍋島亜矢子　大庭早苗　外京由美　岡本直樹（看護師）
　　山下恵美（理学療法士）

【背景と目的】

当院の回復期リハビリテーション病棟では、バイタルサイン測定後のメモ記載とナースステーションでの転記により、看護師がベッドサイドを離れる事態が生じていた。これが ADL 支援等の生活リハビリへの介入や、対話を通した心理的ケアの時間を圧迫していた。本研究は、バイタル自動入力機器（イードクトル社 EVIS Cloud）導入が、ベッドサイド滞在時間の創出に与える効果を検証する。

【取り組み内容（対象と方法）】

回復期リハビリテーション病棟へ EVIS Cloud を導入し、導入前後各 6 ヶ月を比較した。バイタルサイン測定値の自動入力とベッドサイドでの観察入力へ移行し、メモ・転記・往復動線を廃止した。直接ケア時間の変化とスタッフの満足度について、業務量調査およびアンケート調査を用いて評価した。

【結果・経過】

直接ケア時間は 105.3%増加し、看護師のベッドサイド滞在時間が増加した。また、現在集計中のアンケートにおいても、前回調査と比較して DX 導入により業務負担が軽減し、やりがいにつながっている職員が確認されている。

【考察・まとめ】

本取り組みの意義は、DX を単なる「業務効率化」にとどめず、動線の廃止を通じて看護師の「ベッドサイドへの回帰」を実現した点にある。創出された時間で、看護師が患者との対話やアセスメントなど心理的ケアを深め、生活リハビリへ積極的に介入することが可能となった。全国の回復期病棟でも再現可能な DX によるケア充実の新たなモデルである。